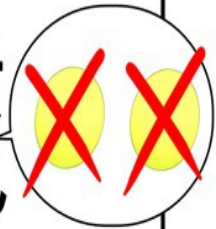


格闘去勢少女3



玉子王子 著

一章 常在戦場？ 武術やってれば当たり前じゃないの？（上から目線）

美邦学園の三号校舎には様々な部室が置かれている。

その端のほうに、総合格闘部という看板が掲げられている部があった。

総合格闘技をやっているわけではない。

「おはよう。っていっても、もう放課後だけど」

言いつつ、部室に入るのを見るからに気の弱そうなオタク系の男子。

渡辺ハジメ。

「あれ？」

自分以外にも三人の部員がいるはずだが、気配がしない。

まあ「気配がしない」もクソも、そんなものを探る能力はかけらもない。

スポーツもやったことがない根っからのオタクであるが、人がいる音がしないな、ぐらいはわかる。

「おかしいな、バカでかい森宮がいるなら、わかるはずなのに。コロボックルみたいな真帆ちゃんならわからないかもしれないけど……」

部室を見回す。

その死角、入り口の陰にしゃがむコロボックル。

ぱっと見、小学生にも見えるロリ系美少女、白崎真帆。

——誰がコロボックルじゃー。んなふうにしてたんかい。これはタマタマにお仕置きだべー。

お仕置きはまだしも、なぜ玉狙いになるのだろうか。

それは白崎が金責め大好きのドS少女だからである。

チラ、と机の下を見るコロボックル。

机の下には、バカでかいワイルド系美少女、森宮十志子が潜んでいた。

——バカでかいだと。確かにあたしはバカでかいが、女の子様相手に「バカでかい」なんていいだすクソオスのタ○キンの安全は保障できんわなあ。



彼女も玉狙いを当然と考えていた。理由はドSだからである。

隠れている二人。

なぜそうしているかという、遊びである。

誰もいないと油断させ、軽く肩叩き程度の打撃をくらわせる。

油断しちゃだめだぞ、というなんだかわからない教訓を与えようという話だ。

今日真っ先に部室に来た真帆がそれを森宮に実行し、残りの二人にもやろうと隠れている。

森宮はあっさり食らって、多少悔しい。

——まあ、誰だってやられるよな。侍じゃないんだから。

思いつつ、机の下から真帆の動きを見る。

す、と音もなくハジメに近づき、拳を振りかぶる。

狙うは、女には無い部分一択。

前に回り込むのではなく、フックの形で横から撃つ形。

ポン、と軽くいく。

「はぐっ」

へこ、と腰を引くハジメ。

全く大した衝撃ではない、しかし、狙われた場所が問題だった。

金的を食らえば気づく、横に白崎がしゃがんでいることに。

「はぐうう、ちょ……たま……ま、真帆ちゃん……」

びょん、と飛びあがるロリ美少女。

「あははは！ コロボックル参上！ おはようハジメちゃん！ 油断大敵だよ！ 常在戦場でないからね！」

「ふぐうう、い、意味が……」

「はい、デカイ奴登場。誰がバカでかいだと？」

長身、巨乳。ワイルド系美少女といえる。左手片手で大の男を吊り上げ、右手で急所を握り潰す剛力の持ち主。それだけ力があれば玉狙いなど不要だと思えるが、執拗に狙いまくるドS少女。

真帆のほうも、劣らずドSである。

首をかしげ、目を輝かせる。

「あれー？ どうしたのハジメちゃん？ すっごく痛そうだよお。軽く叩いただけなのに、なんで？ えへ」

数限りなく金的をかまし、数えきれないほど睾丸を潰してきた真帆がわからないわけがない。

ナノテクノロジーが発達し、睾丸ぐらいなら一〇秒で治せるナノメカ入りの薬がコンビニで買えるこの時代、「潰してきた」というのは**本当に睾丸を破壊してきた**という事である。

今の自分のフックがどういう効果を生むのかわからないわけがない。

なのに、聞いてくる。

嘲るために、聞いてくる。

——く、クッソ……真帆ちゃん、自分の「玉がなくて金的を食らわない」という優位を見せつけるために、あえてこんな変なことを聞いて来て……知ってるくせに、っていうか**ドンびくぐらいよく知ってる**くせに……悔しい……なんか悔しい……

顔を赤らめるハジメ。

「くううう」

その反応に、明らかに性的興奮を覚えている紅潮した頬をしつつ笑う白崎。

「あは、もしかして……変なところに当たっちゃった？ 当たっちゃったかな？ 男の子の一、大事な一」

近づき、小学生並みに小さいロリ系美少女なので、つま先立ちでハジメの耳元に口を近づける。

「金のタマタマ。おキ・〇・タ・マ、に」



美少女の口から男性器名称が飛び出し、さらに自分がそこを責められた直後である。

さらに顔が赤らむ。

「ね、狙って……」

「えー、狙うわけないよー、だってタマタマだよ？ 男の子の大事な急所じゃない？ 女の真帆には全然わからないけど、痛いんでしょ？ 痛いんでしょー？ そんな、痛い痛い、金的を、遊び半分でやるわけないよー」

「そ、それじゃ今のは……あ」

「ほら、背筋伸ばせ。男なら、ケツなんか振ってんじゃねえ。あは、なんで玉やられた男はケツ振るんだろうな？」

「何度やってもわからないよねえ」

腰を引いてグネグネと尻を捻じっていたハジメの襟首をつかみ、無理やり背を伸ばさせる森宮。

「あ、ちょ」

股間を押さえていた手を挙げ、思わず森宮の腕を掴もうとするハジメ。

「おろし……はふっ」

「タマタマ大丈夫？」

心配して触る顔をしつつ、ペンと掌を無防備な股間に叩き付ける白崎。ペン、で「叩き付ける」もないが、衝撃に目を見開くハジメはまさしく「叩き付けられた」感じだ。

もちろん別の場所なら全く平気である。

だが、場所が場所だ。

「ちょんんん」

手を戻すが、すでに白崎の手で急所は握られていた。繊細に蠢く小ぶりの指が肉袋を締め、玉を圧縮する。

「あーあ、握りにくい、ハジメちゃんのおチン○ン大きすぎるもん。大和大和、大和の大砲！ 玉もでっかくて、私の小さな手じゃなかなか……まあ、そこは慣れで握れるんだけどね」

「器用だよな。どう考えても真帆の手じゃこいつの玉は片金どころか、片金四つにカットしても握れないはずなのに」

「そこは慣れ」

「は、はなし……はぐっ」

「はいグニュグニュ、あは、大丈夫、タマタマはぶじで一す。ってうか、無事もクソもペンってやってるだけなんだけどね。真帆が同じことやられたなら、全然平気！ だって真帆は……ついてないからね！」

「あたしもついてないから、さっきのは全然平気だった」

パン、と先ほど白崎に叩かれた場所を力強く叩く。

見て、ビクッと頬を引きつらせるハジメ。

「あ、ビビったビビった！ タマタマキュツとなったもん！」

「そ、そんな勢いで叩いて大丈夫なの？」

「むしろこのぐらいに心配するそっちの弱さが心配だよ。そんな弱点ぶら下げて、女の子様にデカイ態度取るとか、男どもって勇氣あるというより頭がやばいだろう」

「それだよな！ 女の子様に逆らったら、いたーい、いたーい、キ・ン・テ・キ、食らっちゃうよ？ ってね、わかってないのかなあ。女の子の手で、おキンキン握り潰されたらわかるのかなあ？」

「わからせてやれ、「キ○タマわからせ」だ」

「じゃ、去勢しまーす」

「やめええええ！」

「ぎゃははは！」

「あは、はいきゅっきゅっきゅー、ほんとに潰すわけないよ？ って思ってる？ どうかにやー？ 潰すかもねー、治るからいいジャンの一言で潰すかもねー、片金ぐらいやるかもねー？ 嘘嘘、この流れで潰すわけないよ、友達じゃん？ でも友達だからちょっと潰させてもらってもいいかな。片金だけ！ 片金だけ！ こんな大きいんだからいいよね！ 片金でも普通の人のタマタマー○個分ぐらいのメガトンサイズだし！ じゃけん金の玉を潰しましょうねー」

「はふおおおお！」

「あは、マジビビり！」

「まあお前の場合この流れで「ごめん、ちょっと力入れすぎちゃった☆」っていう感じで、ミスを装ってブチュっといきそうではある。だからこいつがビビるのも当然だろう」

「えー、そんなことしないよー！ まあミスはありうるわけですが？ そして、真帆のかわいいおマンマンはびっしょり濡れているわけですが」

「あたしも濡れ濡れ。もう入れていい位だ。まあ処女だからよくわからんが。……男が玉やられてる姿は最高にセクシーだ。男なんて大嫌いだ、これだけは別だ。でもやっぱり……」

「やっぱり？」

「自分で握って握り潰すほうがより濡れる」

「やめ、やめてっ」

「あは、汗びっしょり！」

「可哀そうになってきたなあー、っていうのは嘘だが、よし、手を貸せ」

「え、あっ」

巨乳、爆乳といってもいいかもしれない。白崎の頭並みの乳房に自分の手がめり込んだことに喜ぶよりむしろ恐怖を感じる。

「いや、大丈夫大丈夫。そんな顔するな、これを理由にキ○タマ潰しはしない。やるなら特に理由なしでやるよ」

「ひiiiiiii」

「これは純粋にサービス、男の急所をギョングンやられてるキモオタクくんへのパイ揉みサービスだ、味わってくれよ」

「うううう、柔らかい、柔らかiiiiiii、指が包み込まれる、気持ちい……ほごおおおおお！」

「はいはい、まったくいで絶対柔らかくないコロボックルのキ○タマ握りの時間ですよっと」

「あははは、別にペチャパイディスってわけじゃないだろ、なあ」

「もちろんもちろん！ ペ、ぺったんこ最高ですから！」

「んー、それじゃ私や百合那みたいなボインボインはダメか？」

「え？」

「代われ真帆」

「はい」

「あ、ちょ……ほうっ！」

「女の子を選び好みするような贅沢なキャン玉くんには金ちゃん潰しでお仕置きだぞ」

「意味が分からない、わからない……ちょおおおおお」

「はい、痛い痛ーいキ○タマ握りだぞー。悔しい悔しいキ○タマ握り、ほらほら、あたしの股ここだぞ。同じように握っていいんだぞ？」

「ふぐううう」

引っ張られ、森宮のスカートの下に手を入れる渡辺。平らな布、けがれ無き白布を撫でるが、そこに握って大逆転できる内臓が飛び出していたりはしない。

それでも意味もなく指を動かし、股間を撫でる。

指が湿ってくる。布はけがれはないが、雌蜜でじつりと濡れているのだ。

「あは、ざんねーん、握るものはありませーん。と、それはそれとして、わかるだろ？」

「いや、何も」

「あたしがどういう状態か」

「いや、全然」

「真帆の金握りで、濡れてるんだよ……」

「よくわからないなあ」

「ここでお前のデカキ○タマをブチュッとやれば、あはは。すごーく、気持ちいいよな？」

「いやいやいや、そんなわけないってあああああああ！」

「ほらぎゅー。ああ、何か女性蔑視発言でもかましてくれよ。それを口実に、コーガン握り潰すから」

「この流れで何もなしじゃ、さすがにちょっとかわいそうだもんね。踏ん切り付けさせてよハジメちゃん」

「ひいいいい、い、い、一天万乗の女の子様に逆らう気は毛頭ありはしねえ……は、放して……」

普通の男なら、どうせ潰されるのだと自暴自棄になって暴言でも吐く状況だ。

玉を握りしめられ、眩暈と吐き気にも襲われて普通の状態ではない。

しかし、それでもハジメは我慢する。

我慢を強いられてきた人生が、それを可能とする。

毎日部の女子たちに玉責めを食らい続けている日々が、それを可能にする——まあそれは我慢してもやっぱり食らい続けるという事だという気もする。

——た、耐えるんだ……ここで「玉無シクソマ○コ！」とか叫んだら、この濡れっ濡れの女二人は、興奮のままに僕のキ○タマを握り潰す。それだけは避けるんだ。

「ほらほら、言っちゃえよ男の子」

「ほら、男だろ？ わかってんだぞ、握ってるからな。いっちまえ、マ○コに対する暴言を」

「って、ちょっと十志子！ 百合那の足音！ かどうか分からないけど、だれか近づいてきてる！」

「よし、それじゃさっきの配置に移れ！ あ、こいつ」

「一緒に机の下に」

「お、そうだな」

急所を握りしめられて棒立ちだったハジメ。

玉握りが終わると、全身の筋肉の緊張が解けてその場に崩れる。

それを軽々と引きずり、机の下に隠れる森宮。

——なんかあのまま食べられそうな感じだね。ま、それはそれとして、百合那百合那。お股にパンチ。ま、意味ないんだけど、女の子同士だし。あ、玉握りはほどほどにして、ハジメちゃんにやってもらえばよかったなあ、そしたら反撃で「キーン」だっただろうに。ちえー。

なんだかんだ言っても、所詮は唯一の男子部員に金的をかます口実でしかなかった。

ハジメの玉狙って遊ぼうよ！ ではあまりにも直球過ぎるので、「みんなの股間パンチ」という形にして、**偽りの公平感**を醸し出している。

実際のところ、女の子三人と男一人では同じ「みんなの股間パンチ」でも、意味は全く違ってくると思えるが。

ともかく、部室が開く。

「んー」

スタンダードな巨乳美少女、桜津百合那。

三者三様のとび抜けた美少女に囲まれてハジメは幸せという見方もできるだろう。

唯一の男として急所攻撃にさらされつつも、桜津の幼馴染だという腐れ縁や気の良さ、弱さ、そして心の奥底に眠る仄暗いドM根性で抜けられない悲惨な状況という見方もできるだろう。

ともかく、桜津。

桜津流という古流武術の継承者。桜津流は嘘か真か、最強と呼ばれる流派である——どういう理屈と基準で「最強」を決めるのかというのはともかく。

総合格闘部の美少女三人はそれぞれ相当に強いが、ありようとしては森宮が格闘技系であり、桜津は武術系、白崎は真ん中といった感じだ。

ようは、桜津は格闘技をやっているというより若くとも武術家なのだ。

——んー、何か心配が。あ、入り口の横に真帆ね。それに、机の下に十志子。あ、ハジメもいるんだ。何隠れてんのかな？

入る、と、死角から近づく白崎。

そして当然のように股間にフック。

パン、とその拳を止める桜津。腕を外に払った。

腕で確実に当てつつ、手を鉤にして摺り上げ、掴む。

攻防一帯の桜津流の受け。

「ほら、捕まえたー」

「あー、なんで？ キ〇タマゴリっとやりたかったー」

「きゃはは！ ないから、私には！ ゴールドボール！」

膝を開き、腰を突き出して笑う桜津。手を離す。

「あーあ、うまく防いだな。騒いだの聞こえたのか？」

「心配だよ」

「静かにしてただろ？」

「それでもわかるって。わからない？」

「いや……わからないな」

「真帆も全然。ハジメちゃんもキン、とやられちゃいました」

「あは、タマタマ？ やだー、かわいそー。っていうか、全然ねえハジメ。お母さんによくやられたのに」

桜津紗月。百合那の母親。桜津流の当主で、子供のころから百合那に常在戦場の感覚を叩き込んできていた。ついでに、幼馴染で家に遊びに来るハジメにもだ。

といっても殴るわけではなく、隙を見て股間を揉み解すという感じだ。

百合那に似て、というか百合那が母親に似ているのだが、とびぬけた美人である大人女性にそういうことをされてすっかりメロメロのハジメ。

実のところ百合那はハジメが好きだが、ハジメは彼女の母親の紗月のほうが好きという始末だ——百合那のこともかなり好きであるが、紗月のほうがより好きである。

今もあこがれの人を思い浮かべ、ほうっと熱い息を吹く。

「紗月さんは優しいけど、こいつら……」

「あー？ こいつら？」

「ドウモ・コイツラ・デス。キ〇タマ潰すべし慈悲はない」

「いやいや、この子たちね？ この子たちは、加減しないし」

「加減しまくってるだろうがよ？」

「そうだよハジメちゃん、真帆たちが本気だったら今頃女の子っすよ」

「今からでも股間だけ女体化しとくか？ こんなちっぽけなボール二つブチュっといくだけで終わりだぞ？ いやお前のは超巨玉だが、体とのバランス的にはやっぱり小さい臓器だろ。それをブチュっといけば終わりだぞ。女終了は面倒だが、**男終了は手続き簡単**」

「ですってさ！ やってもらったらハジメちゃん」

「それより、部活始めよう」

「強引にきたねーハジメちゃん、金の玉守りに来たねー」

「っていうか、何してたの？」

「だから、常在戦場の気持ちを持てるように、軽いパンチをね、股間にね」

「顔とかと違って、ここなら大して痛くないからな」

「そうそう」

「僕はそこが一番きついで！」

「我慢なさい、男の子！」

「そうだぞ、クソオスとしての根性を見せろ」

「別のところにしてよ！」

「っていうかもう終わったからね」

「常在戦場？ それって当たり前でしょ？」

「ぬ？」

「おいおい、マジかよ」

「だって、武術やってれば、当然のことじゃない？ ねえハジメ」

「僕は武術やってないよ」

爆乳美人武術家に子供のころから「常在戦場」を口実に股間を揉み解されてきただけだ。

ともかく、微妙な空気である。

「ふーん、まあ真帆もある程度常在戦場だからねえ、今のパンチぐらいなら余裕でかわしたかな！」

「さてよ、あたしだけだめってのか？」

「まあ二人は別に武術家じゃないしね」

「マウントとしか思えないんだよなあ」

「あたしも油断しなきゃあのぐらい」

「だから油断しないのが常在戦場で」

「よーし、そこまで言うなら、今日からやってみよう。股間パンチ一発一点、食らったらマイナス一点、今日月曜だからちょうどいい、土曜日までの六日で点が多い奴が勝ちだ」

土曜も学校がある世界である。

「ちょっと何言ってるかわからないんだけど」

「乗った！ 真帆乗った！ だって常在戦場だから、いつもと変わらないし！」

「あたしもそれだ」

「へー？ それじゃ私が断ったら常在戦場じゃないから、断ったって設定にされるわけ？ ほんじゃ、やらざるを得ませんわなあ」

「いいねえ、盛り上がってきたね。それじゃ僕が審判やるよ」

「あー？」

「きゃははは！ ハジメちゃんナイス！」

「ハジメえ、それただ自分がおキンキン狙われたくないだけでしょうが。ハジメも当然選手なのよ、同じ部員なんだから当たり前でしょうが」

「それじゃ攻撃部位変えてくれ！」

「何言ってるのハジメちゃん！ 同じ場所なんだから公平だよ☆」

「そうだ、股間は股間。男も女もない」

「いやあるよね！？ 股間パンチって、男だけすっごいまずいよね！」

「えー？ なんで？」

「なんでかなあ、真帆わかんない」

「あたしもわからないな、どういう事なんだ？」

ニヤニヤと、美少女たち。

キュッと股間が引き締まるハジメ。

「そ、それはそのー」

「あ、真帆わかった！ 男の子はねー、ここにこれがあるからだ！」



腰を突き出し、スカートの前に指でリング二個。

「あー、それか！」

「なるほどなるほど、そういえばハジメついてたっけ、急所の肉ボール！」

「クソオスは股間に玉二つ。それに当たると軽いパンチも、いたいいたーい、いったーい、金的という必殺技に早変わりなんだったなー、男は弱い、キ〇タマ弱い」

「きゃはは！ それそれ！」

「もう、男の子って仕方ないよねえ」

「そ、そうなんだよ、玉は仕方ない、だから」

「それじゃ、明日からね」

「頑張るぞー」

「僕は降りる！」

「降りてもいいけど、タマタマは狙うよー」

「当然ですわなあ、これはゲームでもあるが、常在戦場の感覚を養うための訓練なんだから。むしろ抜けたとかいう奴こそ、タ○キンを集中攻撃だな」

「きゃ、それじゃ真帆も抜けたりしたら、ここ集中攻撃だ！ こわーい！ あ、でも真帆タマタマないからやっぱ平気かなー！」

「大丈夫だよハジメ、お母さんに鍛えられてるでしょ？」

「そうだよ。そしてもし万一のことがあっても、再生薬があるからすべて丸く収まるという理屈」

「それな！ 十志子の言う通り！」

「あ、ついでに一番負けた人が、一杯三千円のパフェをおごるってことにしよう！ ただし……」

「もちろん、あたしたち三人の間でだ。負けた奴が四人分払う」

「やったー、パフェただで食べられるー」

苦笑いするしかないハジメ。

基本、優しい子たちなのだ。まず確実に一番負けるだろうハジメが奢る羽目になるのはかわいそうと、当然のように競争から除外してくれる。

いじめをやるような人間とはメンタリティーがまるっきり違う。

ただ、ハジメとも違う。

膝を締める。

——玉狙われるヤバさが、やっぱわかってないんだこの子らは。ついてないからなあ、この子ら、一玉もついてないから、一生わからないんだ……玉をやられたあの、へこっと瞬時に腰が動くあの恐怖と苦痛が……急所痛を知らないで済む人生……玉がなくなるなんて絶対嫌だけど、急所痛がない人生はうらやましい……

奢らせるのはかわいそう。

しかし女の子三人に急所を狙われまくるのは別にかわいそうじゃない。

何とも言えない線引きに苦笑いしつつ、明日から始まる金責めの一週間に恐怖する。

——ってちょっと待て、もともとこの子ら、大した理由もなく玉狙ってくるから、変わらないような……

そう思うと、むしろ普段の生活への恐怖がわいてこないでもなかった。

体験版終わり

この後、訓練が股間を狙いあうゲームに、
そしてさらに女たちがハジメの玉を狙うだけのゲームにと、
ドS女子の行動が徐々に建前を忘れ、純化していきます

続きは製品版でぜひお楽しみ下さい。